

雑学 鳥獣植物戯詩

全24回

八木幹夫

第14回【コノハムシの擬態】

木の葉が落ちて森が騒ぐ。生き物は種の存続を運命付けられている。溪流の山女や鮎は下流から上流にのぼる途中で川床の砂地や石に体色を合わせる。人間を含め外敵から襲われないためだ。川だけでなく森も海の生物も同様だ。熱帯の森に棲むナナフシなどはほとんど木の枝を擬した色合いと形が神秘的でさえある。

コノハムシは虫に食われた葉の形状まで遺伝子に組み込まれ、木の葉の間にひそむ。外敵から隠れるために「葉っぱになりたい」と何万年も思い続けてきた結果なのか。その間に微調整の修正があつたはずだが、突然変異の「木の葉」に変身するDNAを一瞬にして獲得したことは不思議でならない。

「トリヤサルガワキヨスドオリスルキヨウモナントカクワレズニイキノビタハヤクメスヲサガシテミライニイノチヲツナゲナケレバドレガコノハデドレガメスノコノハムシナノカカタカナノモリニマヨウ！」と呟いたかどうかは定かではない。

虫にとつての数百万年、数億年は化石の中の年月ではない。獲物を狙うコノハムシ。おい、そいつは葉っぱじゃないぞ。生存競争は現在も進行形だ。